

# 子どもたちが主役になることを 目指した防災学習の創出



大阪府泉大津市内の全小中学校において防災学習を行っています。特に津波の危険性が高い沿岸部の小学校では、総合的な学習のテーマとして重点的に取り組んでいます。

5年生（浜小学校）が主催した全校津波避難訓練の様子

## 活動の概要

目的	専門家と非専門家学び合う防災学習を実現するために、子どもたちが主役となり防災に取り組むことで新たな防災の知恵を発信することを目指す
連携メンバーおよび役割	泉大津市教育委員会 / 泉大津市危機管理課 / 泉大津市立小・中学校 …学校教育、地域防災の専門家として、大学生に指導、助言をする他、活動場所の提供を行う 関西大学社会安全学部 城下英行研究室…学生の組織と指導
活動地域	大阪府泉大津市
活動期間	2012年度～（継続中）

## 連携の経緯

泉大津市は海に面したまちであることから、同市において津波防災は重要な課題となっている。2011年の東日本大震災の発生もあり、2012年に泉大津市危機管理監より同市の防災教育を一層推進するために城下研究室に相談を受けたことから連携が始まった。同年秋には、城下が同市の防災アドバイザーとなり、2013年度から本格的な連携を開始し、毎年度、同市内の小中学校において大学生がボランティア講師となって防災教育を展開している。

## 解決すべき課題

- (1) 学校において防災教育を行うための準備時間がない。
- (2) 学校で学ぶ子ども以外の人への働きかけができていない。



防災教材「クロスロード」を使った防災教育（楠小学校）

避難訓練について議論する子どもたち（浜小学校）

## 大学の役割

学習の目的は、自分自身が持つ世界（関係）に直接、間接に影響を与えることであると定義できる。学習の目的をこのように定義するとき、防災学習は、防災を通じて自分自身が持つ世界に影響を与えることが目的となる。しかし、一般的な防災教育では、専門家を持つ知識・技術を非専門家に一方的に伝えるというかたちを取るから、学習者である非専門家は、防災を通じて自分自身もつ世界に主体的に影響を与えることが難しくなっている。すなわち、俯瞰的にみれば、一方的な知識・技術の伝達を行う防災教育では、非専門家は専門家の助言に従うのみであり、世界に影響を与えているのは専門家だけになってしまっている。もちろん、日本の防災対策の歴史を見れば専門家が防災力向上に果たす役割は重要であることは明らかである。

しかしながら、東日本大震災の際に「想定外」という言葉で形容されたように、専門家（≒科学）であっても正解が分からない問題が防災分野には存在している。こうした現状を踏まえる時、防災力向上のためには、科学の弱点を補うような防災対策を提案することも求められている。

防災の非専門家が防災に主体的に参加することで、科学が見落としていた防災対策を発見することが可能となると期待される。そして、そうした防災対策が容れられることが、上述の防災学習の目的を達成することにもつながると考えられる。そうした防災学習が生まれるような場を提供することが、大学の重要な役割である。



子どもたちが制作したDVDの一般上映の様子（アルザ泉大津）

## 成果

- (1) 市内全小・中学校における防災教育の実施
- (2) 大学生による防災教材の製作
- (3) 浜小学校における総合的な学習の時間を用いた継続的な津波防災学習の実施

## 今後の展望

- (1) 継続的に学校における防災教育を実施する
- (2) 市民も参加できる学習の場を提供する

## 研究者の紹介



社会安全学部 准教授  
城下 英行  
(しろした ひでゆき)

2010年度に社会安全学部に着任。本物の防災活動に参加する機会を提供することが防災教育であるという立場に立ち、国内外のさまざまなフィールドで実践的な研究を行っている。

## 現場の声

・藤谷考志氏（泉大津市教育委員会指導課）

防災カードゲーム「クロスロード」を使用した防災学習、浜小学校での総合的な学習の時間を用いた防災学習、どちらも子どもたちが真剣に考え意見交流している姿が見られました。まさに今求められている主体的で対話的で深い学びだと感じました。子どもたちが自分の考えを持つ大切さを実感できたのではないかと思います。